

## かけがえのない 海洋環境を持つ国

軽快な音楽をBGMに、カメラが海中を泳いでいく。色とりどりの魚たち、揺らぐ海草、サンゴ、カニ、エビ、ヒトデ…。青年海外協力隊の菊池佳さんが、ケニアの海の魅力を子どもたちに伝えるために手作りしたDVD教材だ。「みんな夢中で見入っています。こんなにきれいで、素晴らしい海が近くにあるのに、子どもたちはほとんど知りません」。

菊池さんの配属先はWCK (Wildlife Clubs of Kenya)。青少年への環境教育を目的に1968年に設立されたNGOだ。活動の拠点はケニア第二の都市モンバサ。ヨーロッパから多数の観光客を迎えるリゾート地でもある。

「僕の家近くには、40分ほど歩けるビーチがあります。でも、地元の人が行けるのは端と端だけ。その間のビーチは豪華なホテルに警備されていて、そこからわずか30分足らずのモンバサ海洋国立公園について知るケニア人があまりに少ないのです」

さらにケニアではごみのポイ捨てが多く、「人々の環境に対する意識はまだまだ低い」という。特に、モンバサのような大都市では海辺に大量のごみが放置され、そこから流れ出る物質が海を汚染する。

青年海外協力隊  
Kikuchi Kei

## 菊池 佳さん



青年海外協力隊  
Iida Manami

## 飯田 愛実さん



## 潮騒に包まれ、 満天の星の下で暮らす喜び

「ここは世界有数のサンゴ礁や海洋生物が生きる貴重な海だ！」と素晴らしい自然が危機にさらされる前に、その事実を未来をつくる子どもたちに知らせること。それが、菊池さんの活動の最大のテーマだ。

今、菊池さんは週に5、6回のペースでモンバサ近郊の学校を巡回し、海と自然に関する授業を行っている。その教材として使っているのが冒頭に紹介した映像だ。そして、時にはビーチに出て、ガラス張りになったボートの底から美しい海を子どもたちに見てもらう。

赴任してから2年。これまでに接してきた子どもたちは延べ2000人。学校に行くと、「ケイ、ケイ」と言って迎えてくれる。それがやりがいでもあり、喜びだ。子どもたちが自然の大切さに目を向け始めている…。菊池さんが、そう確信する時でもある。

もう一人、ケニアの海に魅せられた青年海外協力隊員がいる。09年8月に赴任した飯田愛実さんだ。モンバサよりさらに南部の町・シモニの沖合にあるキシテ・ムブングティ海洋公園を管理する、ケニア野生生物公社(KWS)の一員として活動する。

着任早々、飯田さんは驚かされた。環境教育のスタッフがいない。担当部署もない。その上、共に活動するはずだったスタッフは3年間の学業休暇に入ってしまった。小中学校への巡回授業は停止したまま。つまり、環境教育を「新人」の飯田さんが音頭を取り、ほかのスタッフを巻き込みながら行うことになったのだ。アフリカの地を初めて踏んだ飯田さん。動揺し、不安を感じたことは容易に

想像できる。

そんな飯田さんを支えてくれたのはやっぱり現地の人々だった。同僚には、地元詳しいシモニ出身者がいる。海洋公園勤務のベテランや、日本でJICAの環境教育研修に参加した人たちもいる。こうした同僚の協力を得て、飯田さんは1月から、近隣小学校5校への巡回授業を開始した。内容は、KWSや海洋公園の役割、今回テーマとしたサンゴの大切さをビデオやクイズ形式で紹介する90分のプログラムだ。また、飯田さんは教材を作るために海に潜り、魚やサンゴを撮影する。地元のコミュニティグループと環境保全について話し合ったり、時にはKWSの同僚にパソコン操作を教えたりもする。「シモニの人たちはとてもフレンドリーで、良き話し相手になってくれます」。

そして、彼女を支えるもう一つが、自然の美しさだ。

「シモニは静かで穏やかな漁村です。道端に放置されたごみは気になります。が、空気はきれいで、潮風と磯の香りが心を洗ってくれます。夜には潮騒を聞きながら満天の星空が堪能できます。私は今、素晴らしい環境の中で暮らしています。でも…、時々思うんです。ここに住む人々はこの素晴らしいさに気付いているんだろうか」

キシテ・ムブングティ海洋公園までは、シモニから船で1時間弱。移動中、8割もの確率でイルカに出会えるという海の楽園だ。こうしたかけがえのない海を次代に残していくために、菊池さんと飯田さんは満天の星空の下で新たな意欲に燃えている。



ケニアの自然は海だけではない。菊池さんは植林活動のほか、落ち葉や豆炭などを利用した肥料づくりなどを通じて、4R[リデュース(減量)・リユース(再使用)・リサイクル(再資源化)・リフューズ(購入拒否)]の重要性も伝えている

### きくち・けい

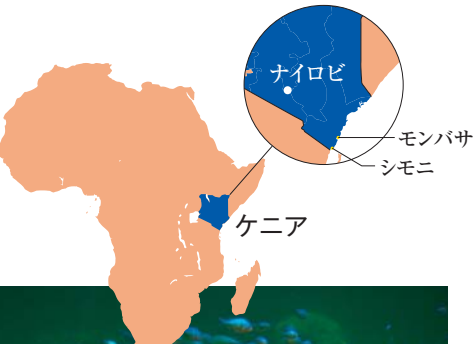
1985年北海道出身。ニュージーランドのウェリントン・ビクトリア大学(開発学・環境学専攻)を卒業後、青年海外協力隊に。2008年3月よりケニアへ。



巡回授業で小学生にサンゴについて話す飯田さん。終了後には児童や先生にアンケートを取り、次のプログラム作りの参考にしている

### いいだ・まなみ

1970年長野県出身。筑波大学大学院ビジネス科学研究科修士課程修了。気象情報会社、外資系証券会社、銀行などを経て2009年8月よりケニアへ。



手付かずの大自然が残るケニアの海(上)が今、大量のごみにより汚染されつつある。海の美しさ、大切さを地元の子どもたちに知ってもらおうと2人は清掃活動を実施

## 「ケニアの子どもたちに、 身近な海の素晴らしさを伝えたい」

ケニアには美しい海がある。

だが地元の人々の多くは、ビーチなどにゴミをポイ捨てし、その価値に気付いていない。

そんな大自然の大切さを伝えようと、環境教育に励む青年海外協力隊員たちがいる。

第15回

## ゲンバの風

